

学校教育における性的指向・性同一性に配慮した HIV 予防教育に関する研究

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）
研究分担者：佐々木 掌子（立教女学院短期大学 専任講師）1年目のみ
研究協力者：河合 隆次（奈良県高等学校人権研究会 事務局長）

研究要旨

わが国の HIV/AIDS サーベイランス開始以来、男性同性間における HIV 感染とその対策は喫緊の課題である。若年層の中でも MSM における感染の現状がある一方で、学校教育現場において性的指向など MSM の存在を意識したエイズ予防教育は十分に実施されてきていない。平成 26 年厚生労働省エイズ発生動向年報によれば、男性の性的接触による HIV 感染者のうち同性間が 76%である。学校現場のみならず社会の中で多様なセクシュアリティおよびセクシュアルマイノリティの存在が否定的に捉えられることや、十分に認識されていない現状がある。そこで本研究では、従来の性感染症予防教育で重視されてきた「自己と他者の尊重」をセクシュアルマイノリティまで広げ、これを学校教育において取り扱うことにより HIV 感染拡大を防ぐという仮説に基づき、取組をおこなった。高校教諭らと共に開発した授業案および授業資料開発し、それをもとに授業実践を行い、その教育効果を授業前後の質問紙調査によって評価・検討した。

A. 研究目的

わが国サーベイランス開始以来 HIV 流行の中心は MSM であり、性行動が開始される前の MSM に対しては学校教育を通じて予防行動の必要性を伝えていくことが重要である。

しかし、筆者らがこれまでに実施した調査によれば、10 代 MSM のおよそ 9 割は男女間におけるエイズ予防教育を学校で受けたことがあるのに対して、男性同性間のそれは 2~3 割程度であることが示されている。つまりわが国の HIV 流行状況に応じた予防教育が学校で実践されていないこと、その困難があるとも言えよう。

MSM におけるいじめ被害率や不登校率、自殺念慮率、自殺未遂率は異性愛者集団と比較して明らかに高率であることは国内外の複数の研究で示され、中学校から高校までの学齢期に性的指向に起因するそれらのライフイベントが発生・集中していることもわかっている。中長期化する学齢期に直面する生きづらさやいじめ被害などを通じて自尊感情の傷付きなどは、予防的保健行動の阻害要因のひとつと考えられるようになっており、HIV をはじめとする性感染症の罹患に関連があることも指摘されている。そのため、男性同性間における HIV の流行とその対策を視野に入れ

た教育を学校で実施・推進するためには、まずは性の多様性を正しくかつポジティブな情報として教示していくことが不可欠である。本研究ではその視点に立脚した上で、MSM 対象のエイズ予防教育の推進に資するために、性の多様性を伝える授業案を開発し、その教育効果と測定することを目的とする。

B. 研究方法

【1年目】

1. 研究協力者

奈良県高等学校人権教育研究会所属の人権担当高校教員と、中学の教員 2 名、及び神奈川県公立高校教員 2 名から協力を得て、授業案開発にあたって情報収集を行った。なお、奈良県の高等学校教員に関しては、奈良県高等学校人権教育研究会内に「多様な性についての人権学習教材検討部会」が発足され、指導案について現場の教員（12 名~51 名）から意見を徴収した。また、均霑化により資するために神奈川県の高教員 2 名からも同じ指導案について意見を徴収した。

2. 教材作成のための検討会

7 回の検討会を持った。教材作成は、研究分担

者が作成した授業案に対し、教員が検討を加え、授業として不適切な点はないか、授業のやりやすさや難しさの点に関してはどうか、など多角的に意見を出してもらう形式を取った。また、研究分担者による講演を行い、学校教育の中で特に授業として多様な性を取り扱っていくべき根拠について話した。その後、研究協力の募集を行った。

【2年目】

1. 授業（介入）対象者

A 県の公立中学校と県立高校の 2 校を対象に、2016 年 1 月に実施した。中学校は 2 年生 6 クラスと 3 年生 6 クラス、高校はビジネス系 4 クラス、工学系 4 クラスを対象とした。回収数は授業前 527 名（中学校 347 名、高校 280 名）、授業後 526 名（中学校 347 名、高校 279 名）であった。

2. 授業計画概要

奈良県高等学校人権教育研究会と共に研究 1 年目からの検討を経て、まとめた授業案および授業資料を開発した。授業のねらいは「性の多様性について知り、肯定的にとらえる」ことと、「自分や他者も『多様な性』を生きる一員であること、社会の一員であること」に気づくことである。留意点は「当事者がクラスにいるという前提で授業をする」こと、「話やすい雰囲気づくり」を行うこと、「問題のある発言については、学習機会と捉えて、対応・展開する」ことの 3 点とした。

3. 実施手続き

授業前日の朝に授業前アンケートを配布し、授業を行うクラスの生徒に回答を求めた。アンケートの回答は任意であり、日常生活や成績に影響することはないこと、回答したアンケート内容は授業を担当した先生は見ず、専門家のみが閲覧することを担任教師から説明した。アンケート用紙の回収にあたっては、出席番号順ではなく順不同のまま回収し、担任教師がその場であらかじめ用意したのり付き封筒に封入した。

翌日の授業時間を使い、各クラスの担任教師が資料をもとに授業を行った。授業終了直後、授業後アンケートを配布し、授業に参加した生徒に回答を求めた。授業前アンケートと同様の説明の後、同じく出席番号順ではなく順不同のまま回収し、担任教師がその場でのり付き封筒に封入した。

【3年目】

1. 授業（介入）対象者

A 県の県立高校 13 校（1 年生 20 クラス、2 年生 47 クラス、3 年生 6 クラス）の生徒 2,753 人を対象に、2016 年 4 月～11 月に授業と授業前後の質問紙調査を実施した。

2. 授業案

1～2 年目の予備調査を経ての本格実施と位置づけ、過年度までに開発した授業案と指導上の留意点を用い、授業実施校および対象となる生徒数を増加して実施した。

3. 実施手続き

授業実施当日の朝に授業前アンケートを配布し、生徒に回答を求めた。アンケートの回答は任意であり、日常生活や成績に影響することはないこと、回答したアンケート内容は専門家のみが閲覧することを担任が説明した。アンケート用紙は順不同のまま回収し、担任教師がその場でのり付き封筒に封入した。その後、各クラスで実施校の教員が授業案と予め定めた指導上の留意点をもとに授業（1 時限 50 分）を行った。終了直後、授業後アンケートを生徒から配布・回収した。

授業前後のアンケートで性の多様性に関する知識、態度、考えについての 14 項目に対する回答を求めた。また、授業前アンケートにはこれまでのセクシュアルマイノリティに関する学習機会の有無に関する設問（「これまでにセクシュアルマイノリティについて学校で習ったことがある」「これまでにセクシュアルマイノリティについて自己学習したことがある」）を 2 問、授業後アンケートには自由記述項目（授業全体を通して、気付いたことや感想）を 1 問付け加えた。

（倫理面への配慮）

本研究は、宝塚大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。加えて、授業前後のアンケート実施に際し、担任教師からアンケートが任意回答であることや無回答による不利益は生じないこと、プライバシーの保護について生徒へ説明した。また、授業前後のアンケートの連結は、個人情報の保護の観点から氏名ではなく出席番号によって行った。

C. 研究結果

【1年目】

1. 授業案概要

授業は2回(2コマ)に渡るものとして設定した。

(1回目授業案)1回目の授業の目的としては、以下二つが設定された。①セクシュアリティは、さまざまな要素のグラデーションの組み合わせであることを理解する。②自分のセクシュアリティについて振り返り、どのようなセクシュアリティも尊重されることを学ぶ。

(2回目授業案)2回目の授業の目的として以下二つが設定された。①セクシュアリティの多様性が否定されると不健康な結果に、肯定されると幸せな結果になることを知る。②自分と友達のセクシュアリティの在り方が違うということを前提に、違うことを尊重し、肯定できるようになる。

2. 教員から徴収した意見

授業案をもとに小グループに分かれてディスカッションをしてもらい、グループごとの意見を集約し、徴収した。

【2年目】

中学生の授業前後の比較

Q1. 性別は「男」か「女」の2つしかないでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた161名のうち38.5%(62名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q2. 男装は気持ち悪いでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた50名のうち34.0%(17名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q3. 女装は気持ち悪いでは $p<.01$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた83名のうち26.5%(22名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q4. 異性を好きになることが当然だでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた160名のうち33.1%(53名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q5. 同性婚(同性同士の結婚)ができてもいいでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた36名のうち27.8%(10名)が授業後には「そう思う」と回答した。

Q6. 性別を変えたいと思うことはおかしいでは

授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた40名のうち35.0%(14名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q7. 自分の友達が同性愛者だとわかったら、抵抗を感じるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた63名のうち22.2%(14名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q8. 自分の友達が性同一性障害だとわかったら、抵抗を感じるでは $p<.05$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた39名のうち28.2%(11名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q9. 正直な気持ちとして、男性の同性愛のことは理解できないでは $p<.01$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた91名のうち31.9%(29名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q10. 正直な気持ちとして、女性の同性愛のことは理解できないでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた84名のうち33.3%(28名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q11. 正直な気持ちとして、性同一性障害のことは理解できないでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた51名のうち31.4%(16名)が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q12. 友達から同性愛をカミングアウトされたら、受け入れられるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた37名のうち56.8%(21名)が授業後には「そう思う」と回答した。

Q13. 友達から性同一性障害をカミングアウトされたら、受け入れられるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた25名のうち60.0%(15名)が授業後には「そう思う」と回答した。

Q14. 「ホモ、レズ、おかま」などの発言は差別語だでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思わない」と回答していた65名のうち52.3%(34名)が授業後には「そう思う」と回答した。

高校生の授業前後の比較

Q1. 性別は「男」か「女」の2つしかないでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 133 名のうち 46.6% (62 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q2. 男装は気持ち悪いでは $p<.05$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 41 名のうち 36.6% (15 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q3. 女装は気持ち悪いでは $p<.01$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 68 名のうち 32.4% (22 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q4. 異性を好きになることが当然だでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 137 名のうち 40.1% (55 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q5. 同性婚 (同性同士の結婚) ができてもいいでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた 42 名のうち 42.9% (18 名) が授業後には「そう思う」と回答した。

Q6. 性別を変えたいと思うことはおかしいでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた 22 名のうち 50.0% (11 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q7. 自分の友達が同性愛者だとわかったら、抵抗を感じるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思う」と回答していた 58 名のうち 29.3% (17 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q8. 自分の友達が性同一性障害だとわかったら、抵抗を感じるでは $p<.01$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 25 名のうち 4.0% (1 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q9. 正直な気持ちとして、男性の同性愛のことは理解できないでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 73 名のうち 35.6% (26 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q10. 正直な気持ちとして、女性の同性愛のことは理解できないでは $p<.05$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 54 名のうち 35.2% (19 名) が授業後には「そう思わな

い」と回答した。

Q11. 正直な気持ちとして、性同一性障害のことは理解できないでは $p<.05$ で有意差がみられた。授業前には「そう思う」と回答していた 44 名のうち 40.9% (18 名) が授業後には「そう思わない」と回答した。

Q12. 友達から同性愛をカミングアウトされたら、受け入れられるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた 35 名のうち 37.1% (13 名) が授業後には「そう思う」と回答した。

Q13. 友達から性同一性障害をカミングアウトされたら、受け入れられるでは授業前後で有意な回答数の変化はみられなかった。授業前には「そう思わない」と回答していた 26 名のうち 42.3% (11 名) が授業後には「そう思う」と回答した。

Q14. 「ホモ、レズ、おかま」などの発言は差別語だでは $p<.001$ で有意差がみられた。授業前には「そう思わない」と回答していた 82 名のうち 46.3% (38 名) が授業後には「そう思う」と回答した。

【3年目】

1~2 年度の子備調査を経て本格的実施と位置づけた。授業実施校および対象となる生徒数を大幅に増加して実施した。

1. 基礎集計

回収総数 2,753 件のうち、607 件は授業前後の両方に回答していない、生徒番号が記入していない等の理由で無効と判断され集計から除外した。回収データは出席番号で授業前後の回答を紐付けた。効果評価の結果、14 項目いずれにおいても有意であった。

Q1. 性別は「男」か「女」の2つしかない

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒 (1,444 人) のうち、51.25% (740 人) の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体で見ると、望ましい回答をした割合が授業前では 32.71% だったのに対し、授業後では 64.82% と増加した。

Q2. 男装は気持ち悪い

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒 (648 人) のうち、46.76% (303 人) の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。

全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では69.80%だったのに対し、授業後では79.59%と増加した。

Q3. 女装は気持ち悪い

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(996人)のうち、44.78%(446人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では53.59%だったのに対し、授業後では71.30%と増加した。

Q4. 異性を好きになることが当然だ

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(1,608人)のうち、43.91%(706人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では25.07%だったのに対し、授業後では55.73%と増加した。

Q5. 同性婚(同性同士の結婚)ができてもいい

授業前に「そう思わない／わからない」と回答した生徒(757人)のうち、43.59%(330人)の生徒が授業後に「そう思う」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では64.73%だったのに対し、授業後では73.77%と増加した。

Q6. 性別を変えたいと思うことはおかしい

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(573人)のうち、47.47%(272人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では73.30%だったのに対し、授業後では79.96%と増加した。

Q7. 自分の友達が同性愛者だとわかったら、抵抗を感じる

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(1,096人)のうち、41.33%(453人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では48.93%だったのに対し、授業後では63.33%と増加した。

Q8. 自分の友達が性同一性障害だとわかったら、抵抗を感じる

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(914人)のうち、41.79%(382人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では57.41%だったのに対し、授業後では66.59%

と増加した。

Q9. 正直な気持ちとして、男性の同性愛のことは理解できない

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(1,226人)のうち、40.78%(500人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では42.87%だったのに対し、授業後では60.25%と増加した。

Q10. 正直な気持ちとして、女性の同性愛のことは理解できない

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(1,126人)のうち、42.72%(481人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では47.53%だったのに対し、授業後では64.40%と増加した。

Q11. 正直な気持ちとして、性同一性障害のことは理解できない

授業前に「そう思う／わからない」と回答した生徒(985人)のうち、44.77%(441人)の生徒が授業後に「そう思わない」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では54.10%だったのに対し、授業後では67.10%と増加した。

Q12. 友達から同性愛をカミングアウトされたら、受け入れられる

授業前に「そう思わない／わからない」と回答した生徒(1,048人)のうち、45.99%(482人)の生徒が授業後に「そう思う」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では51.16%だったのに対し、授業後では67.29%と増加した。

Q13. 友達から性同一性障害をカミングアウトされたら、受け入れられる

授業前に「そう思わない／わからない」と回答した生徒(978人)のうち、47.75%(467人)の生徒が授業後に「そう思う」と回答が変化した。全体でみると、望ましい回答をした割合が授業前では54.43%だったのに対し、授業後では69.43%と増加した。

Q14. 「ホモ、レズ、おかま」などの発言は差別語だ

授業前に「そう思わない／わからない」と回答した生徒(1,301人)のうち、49.65%(646人)の生徒が授業後に「そう思う」と回答が変化した。

全体で見ると、望ましい回答をした割合が授業前では39.38%だったのに対し、授業後では64.77%と増加した。

D. 考察

【1年目】

研究1年目は、学校教育におけるセクシュアルマイノリティへの否定化及び非可視性に基づく非尊重の風土や態度を問題視し、このような状況が当事者の自尊心を低下させ、精神的健康の著しい悪化、それらが蓄積されることによってHIV感染の脆弱性を高め、リスクのある性行動を導くという先行研究を基盤に、「自己と他者を尊重する形で人間関係を構築する」ことを教育目的とし、自分のセクシュアリティが尊重されること、他者のセクシュアリティを尊重することを学んでいくことにより、HIV感染など不健康な行動や結果につながるための予防をする授業案を作成することが目的であった。

そして、その授業を受けた生徒らが実際に、自己と他者を尊重するようになってきているのか、そのことによって予防的保健行動の実践へつながることを将来的な着地点とする。

研究1年目は、その元となる授業案を作成するために、授業案を練り直し、現場に即したものにすべく、学校現場の現役教員と討議を繰り返した。

【2年目】

1. 学校別クロス集計

授業前後通して、全体的に「質問の意味がわからない」の回答が中学生で回答率が高い傾向にあった。特に、授業前で有意差のあった「Q8. 自分の友達が性同一性障害だとわかったら、抵抗を感じる」や「Q11. 正直な気持ちとして、性同一性障害のことは理解できない」では「性同一性障害」、「Q15. これまでにセクシュアルマイノリティについて学校で習ったことがある」では「セクシュアルマイノリティ」と、それまでの学校教育で触れられる機会がないと考えられる単語を使用しており、単語の意味がわからず回答が難しかった可能性がある。その他の授業前の傾向として、高校生は中学生よりも性同一性障害への抵抗が少なく、比較的理解を示す傾向にあり、セクシュアルマイノリティに関して1割程度が学校で学習したことがあると回答した。

2. 学校別の授業前後の各設問の回答状況の推移 中学生において授業後で有意に望ましい回答

が多かった設問は、「Q1. 性別は「男」か「女」の2つしかない」、「Q3. 女装は気持ち悪い」、「Q4. 異性を好きになることが当然だ」、「Q9. 正直な気持ちとして、男性の同性愛のことは理解できない」、「Q10. 正直な気持ちとして、女性の同性愛のことは理解できない」、「Q14. 「ホモ、レズ、おかま」などの発言は差別語だ」の6項目である。Q1、Q4の性の多様性に関する知識についての設問の他、セクシュアルマイノリティへの理解や容認を示すQ3、Q9、Q10、Q14において、有意な望ましい変化がみられた。特にQ3、Q14においては、授業後で望ましい回答の回答数が望ましくない回答の倍以上となった。

3. 学校別の男女別比較

授業の前後や中・高生問わず、有意差の見られた項目はすべて男子生徒よりも女子生徒の方が望ましい回答が多い結果であった。有意差のなかった項目においても、唯一男子生徒の方が望ましい回答が多かったのは、中学生の授業前における「Q14. 「ホモ、レズ、おかま」などの発言は差別語だ」であり、男性60.8% (62名)と女性57.4% (62名)とほぼ同等の数値であったといえる範囲と考えられる。すなわち、性の多様性やセクシュアルマイノリティに対する知識、理解、容認度は男性よりも女性の方が高い傾向であった。

【3年目】

全ての項目で授業前後において生徒のもつ性の多様性に関する知識や態度、考えに有意な変化が認められた。それぞれの学校においてその変化は同様の傾向であった。いずれの項目の授業前後変化は、望ましくない回答をした生徒の43%～50%が望ましい回答へと変化した。このことは50分程度の1度の授業であっても十分な効果が見込まれること、加えてもう1回授業を実施すればさらなる効果があると推測される。また、HIV陽性のゲイ男性の手記を当事者の手記として盛り込み、グループワークに供した。これにより、HIV予防とセクシュアリティの多様性を結びつけて学ぶいい機会となったと言える。

E. 結論

教育現場の教諭らと共に開発した授業案をもとに高校で介入授業を実施し、一定の効果が得られた。今後はこの授業案をもとにした授業の実施

とその普及の働きかけが必要である。「性の多様性の尊重」に基づく自己尊重と他者尊重、相互理解に到達するための教育目標が学校現場で理解され実践されるようになれば、若年 MSM における HIV 感染拡大の予防に資すると考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

(英文)

1. Hidaka Y, Operario D, Tsuji H, Takenaka M, Kimura H, Kamakura M, Ichikawa S : Prevalence of sexual victimization and correlates of forced sex in Japanese men who have sex with men, Plos One, 9(5) : e95675.-doi:10.1371/journal.pone.0095675s, 2014.
2. Matsutaka Y, Uchino T, Kihana N, Hidaka Y : Knowledge about sexual orientation among student counselors: a survey in Japan, International Journal of Psychology and Counseling, 6(6) : 74-83, 2014.
3. Matsutaka Y., Koyano J., Hidaka Y. : Perceptions of reducing HIV-preventive behaviors among Men who have Sex with Men living with HIV. AIDS Research and Therapy (投稿中).
4. Nishimura YH., Iwai M., Ozaki A., Waki A., Hidaka Y. : Perceived Difficulties Regarding HIV/AIDS Services among Public Health Nurses in the Kinki Region of Western Japan: Implications for Public Health Nursing Education in Japan, Open Journal of Nursing, 7(3) : DOI: 10.4236/ojn.2017.73033, 2017.

(和文)

1. 古谷野淳子・松高由佳・桑野真澄・早津正博・西川歩美・星野慎二・後藤大輔・町登志雄・日高庸晴 : 「その瞬間」に届く予防介入の試み—MSM 対象の PCBC(個別認知行動面接)の検討, 日本エイズ学会誌, 16(2) : 92-100, 2014 年.
2. 日高庸晴 : LGBT 学生の存在を考える—キャンパス内でのダイバーシティ推進のために, 大学時報, 358 : 76-83, 2014 年.

3. 日高庸晴 : ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動とそれに関連する心理・社会的要因—全国インターネット調査の結果から—, HIV 感染症と AIDS の治療, 5(2) : 38-44, 2014 年.
4. 日高庸晴・古谷野淳子 : 性的マイノリティの自殺予防, 精神科治療学, 30(3) : 361-367, 2015 年.
5. 日高庸晴 : 教育現場で配慮と支援が必要なセクシュアルマイノリティ, 女も男も, 労働教育センター, 125 : 26-33, 2015 年.
6. 日高庸晴 : 思春期青年期に配慮が必要なセクシュアルマイノリティ, 教育と医学, 慶應義塾大学出版会, 63(10) : 65-73, 2015 年.
7. 日高庸晴・星野慎二・長野香・福島静恵 : LGBTQ を知っていますか?“みんなと違う”は“ヘン”じゃない, 日高庸晴監著, 少年写真新聞社, 13-34, 2015 年.
8. 日高庸晴 : もっと知りたい!話したい!セクシュアルマイノリティ ありのままのきみがいい 1 セクシュアルマイノリティについて, 汐文社, 2015 年.
9. 日高庸晴 : もっと知りたい!話したい!セクシュアルマイノリティ ありのままのきみがいい 2 わたしの気持ち, みんなの気持ち, 汐文社, 2016 年.
10. 日高庸晴ほか : 学校・病院で必ず役立つ LGBT サポートブック, 保育社, 68-70・142-145, 2016 年.
11. 日高庸晴 : もっと知りたい!話したい!セクシュアルマイノリティ ありのままのきみがいい 3 未来に向かって, 汐文社, 2016 年.
12. 西村由実子・岩井美詠子・尾崎晶代・和木明日香・日高庸晴 : 近畿圏の保健師における HIV 検査相談の現状に関する研究, 日本エイズ学会誌, 18(1) : 20-28, 2016 年.
13. 日高庸晴 : 思春期・青年期のセクシュアルマイノリティの生きづらさの理解と教員および心理職による支援, 精神科治療学, 星和書店, 31(5) : 565-571, 2016 年.
14. 日高庸晴 : セクシュアル・マイノリティを取り巻く状況, 法律のひろば, ぎょうせい, 7 : 4-11, 2016 年.

15. 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスと自傷行為，精神科治療学，星和書店，31(8)：1015-1020，2016年。
16. 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルス，こころの科学，日本評論社，189：21-27，2016年。
17. 日高庸晴：性的マイノリティが生きやすい社会とは，母のひろば，童心社，629：4-5，2016年。
18. 日高庸晴監修：セクシュアルマイノリティってなに？，少年写真新聞社，2017年。
19. 日高庸晴：LGBTの児童・生徒はどれくらいいるのか，教職研修，教育開発研究所，2017，1：77。
20. 日高庸晴：思春期に直面するライフイベントとリスク行動，教職研修，教育開発研究所，2：77，2017年。
21. 日高庸晴：子どもの人生を変える先生という言葉，教職研修，教育開発研究所，3：73，2017年。
22. 津田聡子・日高庸晴：性に関する教育における中学校教員の意識調査-教員の性別・学修経験と苦手意識との関連-，思春期学，2017，(印刷中)。

2. 学会発表

(国内)

1. 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用状況。シンポジウム性感染症予防のスタンダードとは？—あなたが健康な生活を過ごすために—。第27回日本性感染症学会学術大会、2014年、兵庫
2. 日高庸晴：MSMにおけるHIV感染リスク行動とその関連要因。第28回日本エイズ学会学術集会、2014年、大阪
3. 日高庸晴：ゲイ男性における薬物使用とHIV感染リスク行動。平成26年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会、2014年、神奈川
4. 古谷野淳子、松高由佳、桑野真澄、小松賢亮、長野香、西川歩美、日高庸晴：個別認知行動面接の実践からMSMのHIV予防を考える。日本エイズ学会、2015年、東京。
5. 古谷野淳子、西川歩美、日高庸晴：MSM対象の認知行動面接の保健師への普及について。第30回日本エイズ学会学術集会、2016年、鹿児島
6. 渡邊さゆり、古谷野淳子、松高由佳、長野香、桑野真澄、川口玲、西川歩美、日高庸晴：20代30代未婚女性のコンドーム使用状況と使用を妨げるセルフトークの関連。第30回日本エイズ学会学術集会、2016年、鹿児島
7. 川畑拓也、小島洋子、森 治代、岩佐 厚、亀岡 博、菅野展史、近藤雅彦、杉本賢治、高田昌彦、田端運久、中村幸生、古林敬一、清田敦彦、伏谷加奈子、柴田敏之、木下 優、日高庸晴：MSM向けHIV/STI検査における検査結果と関連付けたリスク行動調査。第30回日本エイズ学会学術集会、2016年、鹿児島。

G. 引用文献

なし